
思い出の神詩

春功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出の神詩

【Nコード】

N5232B

【作者名】

春功

【あらすじ】

詩ではありません。なぜ人々は思い出を作れるようになったのか？それは、一人の神によるものだった。人間思いの一人ぼっちの神様はずっと人間のために泣き続けた。これは、私に「さよならの手紙」を送って下さった先生、あなたに捧げます。どうか居なくなる前に読まれることを願って……

神様達の樂園が空にはある。

雨が降っていた。

それは空の上の神様の涙。

いつも他の神様から、いじめられていた神様。

泣いていた。

一人は寂しいって。

雨が降っている。

誰一人認めてくれない。

私は存在しているのか？

サーサーサー

雨が降り注ぐ。

私は

「思い出」

思い出を司る神。

その神様が流した涙。

それは……

悲しみの涙ではなく、人々の思い出の根源だった。涙、一粒一粒が思い出となった。

泣く事が私の仕事だった。

それが私の神としての仕事だった。

泣く事はつらい。

つらいけど泣きつづける。

じゃないと思い出は消えるから。

思い出を忘れて欲しくはないから。

思い出を覚えつづけて欲しいから。

たったそれだけ。

それだけが私の願い。

だから、泣いているんだ。

だから、泣き続けるんだ。

だから、私はここに居るんだ。

だから、私は生きているんだ。

そこには。つらい、悲しい神様がいた。

一人ぼっちの泣く事しかできない、それが思い出の神。

その神は自分のために泣いたのではない。

人の役に立ちたかった。

そのただ強い思いが、人々に思い出という、感情を創った。ただ、人間が生きていけるように。

一人ではないことを知ってもらうために。

そのためだけに、思い出の神は泣き続けた。

例え、八百万やちまんにちの神が、人間を嫌っていたとしても。

思い出の神は人間を愛し続けた…

(後書き)

がんばって下さい…これをあなたに捧げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5232b/>

思い出の神詩

2010年10月12日14時39分発行